

✿ 退職者のひとこと

想ひ出

私が入所した頃、平城宮跡の大極殿に象徴的な1本の松が生えていた。草が覆い茂り平城宮跡は廃墟そのものであったが、雨の日も風の日も1本の松は踏ん張っていたのを覚えている。

私が研究所に入った翌年、ピーナッツで有名なロッキード事件が起こった。日本は高度経済成長期を迎え、発掘調査件数は毎年増加した時代である。その頃は、文化財関係者も増加の一途をたどった。発掘調査から保存処理まで、すべてが元気な日々を過ごしていた。前に進むことしか考えていなかった。大晦日、正月も研究所で仕事を続ける年もあった。かつては、西大寺周辺には何もなくて、静かだった。今のようなジャスコや百貨店、銀行などなかった。その後、次々とビルが建設され、今では昔の面影はない。

昭和が終わり、平成の時代を迎えて、日本は徐々に失速してゆくを感じた。そのような中で阪神・淡路大震災が起こった。文化財と防災について深く考えさせられた事件であった。

定年退官数年前に、思いがけない重大な仕事が飛び込んできた。高松塚古墳の石室解体である。最後の大きな仕事として一生忘れないだろう。

物質の劣化は一方向にしか進まない。可逆的な反応ではない。人間でも個人差はあっても、二十歳を過ぎると劣化は、一段と進むと言われている。可能な時と適切な処置によってのみ、劣化を遅らせることができる。時期を逃すと、劣化のスピードを抑制することは不可能である。

現在、平城遷都1300年祭に向けて準備が進められている。通勤電車の窓から日々変わりゆく姿を見ている。30数年前にこの姿は想像できなかった。

(副所長 肥塚 隆保)



副所長室にて

都城制覇!!

奈文研在職中に島根県・荒神谷遺跡出土の青物（青銅器）撮影、古代出雲展の撮影、加茂岩倉遺跡の撮影をしたことで、私のアダ名のひとつに「青もんのぎゅうちゃん」がある。私は文化財カメラマンを目指した時、日本では出雲・吉備・北九州地域の撮影をすることを夢見ており、島根では楽しい日々を経験させてもらった。感謝の気持ちでいっぱいである。

平城では長屋王邸から出土した未洗いのコンテナが、今の小講堂（当時、写場）の前に山積みになっており、「なんぼあんねん!!」と。明けても暮れても木簡ばかり、という時もあった。私は同じ仕事・動作をやり続けるということができない性分なので、知らず知らずのうちに木簡の撮影は佃さんの担当ということになった。自然な成り行きであろう。

もうひとつの夢が、京都市にいたころ何度か唐代の資料を中国や日本で撮影をした経験があり、「いつかは大量の唐三彩を撮影したい」であった。この夢も奈文研に来たからこそ叶った夢である。河南省文物考古研究所では嬉しさのあまり、つつい泥だらけの獣足壺をなめまわしてしまった。「泥の味の記憶」が今も残っている。

学生時代に大津京、卒業してから京都市埋文研にいたので平安京・長岡京、それに合間に大阪市からの依頼で難波宮の撮影にたずさわった。そして平城京、中国でも漢長安城、唐長安城、そして最近の漢魏洛陽城と関わってきた。これからこんなカメラマンは出ないだろう。これだけは自慢してよさそうだ（藤原京は一枚も撮ったことがない）。

今後、九州に本拠地を置き、韓国の加耶で撮影ができるという新たな夢を叶えるため、もう一踏ん張りしなければなりません。（企画調整部 牛嶋 茂）



漢魏洛陽城の現場にて